

現代文 詩

冬が来た

高村光太郎



講師  
渡部 真一

■学習のねらい■

詩に親しみ、表現の特色や、詩の言葉の微妙なはたらきを知るとともに、詩を深く味わう力を養う。

学習のポイント

- 比喩表現に留意して、第一連・第二連の内容を理解する
- 第三連・第四連の内容を読み取る
- 詩の構成を振り返って主題を確認し、表現の特徴をとらえる

理解を深めるために

\* \* \*

比喩表現に留意して、第一連・第二連の内容を理解する

内容の理解と同時に、比喩表現にも注目しましょう。

第二連の三行目、「公孫樹の木も箒ほうきになった」というのは、比喩表現です。

この一行は、公孫樹いちょうの葉が落ちてしまって、枝だけが残っているので、まるで箒のように見える、ということを言っているのでしょう。（庭の落ち葉を集めるときなどに使う箒を思い浮かべてください。）

つまり、私たちはこの一行を、「公孫樹の木も箒のような姿になった」と言い換えて読み取ることができます。この表現のように、「〴〵のような」「〴〵のように」などの、比喩であることをはっきりと示す言葉が用いられていない喩えたとえの表現を

「暗喩」（または「隠喩」）と言います。「〴〵のような」を用いた一般的な比喩は、

「直喩」（あるいは「明喩」）と呼ばれます。

第三連・第四連の内容を読み取る

後半には、ややショッキングな表現があります。第四連二行目、「火事を出せ、雪で埋めろ」という表現です。文字通りに受け取ってもよいでしょうか。それではあまりにも過激な意味合いの詩になってしまいました。

「火事を出せ」は、実際に火事を起こせ、と言っているのではなく、「火事」のような熱く燃えるもの、激しいものを冬がもたらしてくれと期待しているのでしょう。「雪で埋めろ」も、現実にたくさん雪が降って、街を埋め尽くしてほしいというわけではなく、冬の冷たさ・厳しさを作者は求めているのだ、と読むことができます。

熱い火のような激しさや、厳しい寒さで、この世界を満たし、僕の体や心を貫

け、僕を厳しく鍛えよ、ということをお願いしたいのでしょうか。

### 詩の構成を振り返って主題を確認し、表現の特徴をとらえる

作者はまず、冬という季節はどういうものか、を表現しました。冬は、寒さ・冷たさ・厳しさ・激しさを持った季節で、人も自然もいやがる季節だ、ということとです。そんな冬に、「僕」自身がどうかかわるのか、その思いがこの詩の主題でしょう。そういう冬の寒さ・冷たさ・厳しさ・激しさこそ「僕」の求めているもので、その中で自分は成長していくのだ、そういった厳しい環境・苦しい環境は、大歓迎だ、そんな作者の厳しさへの期待・挑戦する気持ちがこの詩の主題であると言えるでしょう。

また、この詩の表現の特徴としては、比喻表現、呼びかけの表現、命令形の言い切りの表現、冬の厳しさや寒さを伝える言葉の響きなどに注目しましょう。

## 冬が来た

高村光太郎

講師  
渡部真一

きつぱりと冬が来た  
八つ手の白い花も消え  
公孫樹の木も筍はらきになつた

きりきりともみ込むやうな冬が来た

人にいやがられる冬

草木に背かれ、虫類に逃げられる冬が来た

冬よ

僕に來い、僕に來い

僕は冬の力、冬は僕の餌食えじきだ

しみ透れとほ、つきぬけ

火事を出せ、雪で埋める

刃物のやうな冬が来た

高村光太郎(たかむらこうたろう)1883年(明治16)〜1956(昭和31)  
東京生まれ。本名、光太郎。彫刻家、詩人。重厚な力感にあふれた人  
道主義的詩人として、近代詩史に独自の位置を占めた。主な著作に、  
詩集『道程』『智慧子抄』『典型』、評論『美について』などがある。「冬  
が来た」は、『道程』(1914年刊)に収録。本文は『高村光太郎集(日  
本の詩 第5巻)』(1978年刊)より。